

國學院大學學術情報リポジトリ

〔講演〕 日本文化理解教育が学校教育にもたらす無限の可能性

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永添, 祥多 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000281

國學院大學人間開発学会第十五回大会(令和五年十一月十一日、於國學院大學たまプラーザキャンパス)

〔講演〕 日本文化理解教育が学校教育にもたらす無限の可能性

近畿大学産業理工学部 教授 永添 祥多

はじめに

演題にある「日本文化理解教育」という言葉は、多分初めてお聞きになられる先生方が多いと思います。「日本文化教育」という言い方もありますし、私が所属している「和文化教育学会」もありますが、いずれにしても日本の伝統や文化の教育をいかにして学校現場で教えていくかを課題としています。

簡単に自己紹介をしておきます。私は山口県下関市の出身です。國學院大學人間開発学会の賛助会員にいただきました。



が、実は私は、この大学の卒業生であり、在学当時、本日の会場であるたまプラーザキャンパスはまだグラウンドのみでした。ただ私は、八王子キャンパスの方で体育の授業を受けておりましたので、ここには来たことがありません。

んでした。

私は文学部史学科日本史学専攻の卒業生です。指導教員は宮崎道生先生。かなり前にお亡くなりになりましたが、新井白石の研究ではたいへんな權威の先生でいらつしやいました。

私は史学科を出た後、母親は大分の湯布院出身、父親は山口出身であったため、大分県および山口県において県立高校の日本史の教員をしておりました。

そこからもう一回勉強したいということで、今度は九州大学大学院の教育学研究科に入りまして、博士前期課程が二年、博士後期課程は四年行き、六年で博士の学位を取りました。教育学研究科といっても、教育史が専門です。明治時代のアーティキュレーション (articulation)、特に中等教育から高等教育への接続について研究いたしました。博士論文「近代日本における進学教育の形成に関する研究―山口高等学校予備門五学校をめぐって―」は、『長州閥の教育戦略―近代日本の進学教育の黎明―』(九州大学出版会、平成十八年)として出版いたしました。学位は「教育学」で取りました。だから私は、四十歳を過ぎてから大学の教員になりました。

現在は近畿大学産業理工学部に通っています。大阪にあると勘違いされる方が多いのですが、そうではありません。近畿大学は令和四年に情報学部を設置して、全十四学部あります。八年連続で志願者が日本一、十九万人ぐらい集めております。なぜ近畿大学がそんなに志願者を集めるのかということを開かれています。よく分かりません。日本の私立総合大学は、國學院大學もそうであるように、文系から派生したものが多く。日本大学も現在はたくさん学部を設置していますが、もともとは「日本法律学校」であり、國學院大學とは、経営母体であった「皇典講究所」に由来し、源流を同じくしている面があります。ところが近畿大学の場合は、私立の総合大学にしては珍しく、理系学部が多くて文系学部のほうが少ない。「近大マグロ」が有名になり、最近ではウナギも養殖に成功しています。そういう実学的なもので名を挙げておりますので、特に西日本の高校生には支持されているのだと思います。

大阪に所在しているのは近畿大学の本部で、マグロで有名な生物理工学部は和歌山にあります。工学部は東広島にあり、一番大阪本部から遠いのが産業理工学部で福岡県の飯塚市です。飯塚といえば旧筑豊炭田で知られていますが、もともと分かりやすく言えば、自民党副総裁の麻生太郎さんの出身地です。かつて石炭産業で栄えた町です。私はそこに所在する近畿大学産業理工学部で教職課程の教員をしております。また、一般教養で日本史を教えています。自宅のある下関から高速道路で通っておりますが、片道大体一時間十分くらいかかります。

高等学校教員を十数年間経験しましたので、それが教職課程の教員になってから非常に役立っていると思います。その時の

人脈がありまして、私立高等学校の教員に本学部の学生をお願したりするのは頼みやすいのです。特に本学部は情報、理科、工業、商業という理系科目を中心に高校の教員免許を出しておりますが、これらの科目の教員は非常に足りない状況です。大本学部は二千人の学生がおり、小さな学部で中学校の免許は出しておりませんが、毎年四十人ぐらいが高校の教員免許を取って、毎年四人程度、多い年で七、八人は教員になっていきます。さて、『長州閩の教育戦略』の要旨は、次の如くです。

日本の教育史学界における定説では、日露戦争以降、明治三十年代の終わりから四十年代にかけて、尋常小学校（高等小学校）↓旧制中学校↓旧制高等学校↓帝国大学というルートの進学階梯が完成したと言われていますが、実は明治二十年代から三十年代にかけて、全く別ルートで、バイパスのような学校を創って帝国大学に進学させていたところがあったのです。それが山口です。

私がこのことに気付いたのは、ある時、帝国大学の卒業生名簿―当時は成績順に並べられ、名前と本籍が記されているのですが―を見ていたら、やけに山口出身者が多い。東京の次ぐらいに山口が多い。なぜ山口が多いのだろうといういろいろ調べてみたら、何のことはない、山口県民が特に頭が良いのではなく、実は山口から帝国大学に入るために別ルートの学校を創っていたのです。そのルートはどうしてできたのか、どのような授業をしていたのか、その教育成果はどのようなもので、どういった人々がそのバイパスルートで帝国大学に進学していたのか。そういういったことを明らかにしたわけです。

日本文化理解教育とは何か

本日の話は伝統・文化の教育、日本文化理解教育の目的と可能性についてです。第一に、日本文化理解教育とは何であるか。第二に、伝統や文化の教育に関する先生方や小・中学生、つまり授業をする側と教えられる側の意識の実態について。第三に、この日本文化理解教育、伝統・文化教育を行うことによって、伝統・文化を理解するだけではなく、学校教育における副次的な、その他の波及部分もあるということをお話します。

まず、「日本文化理解教育」とは何か。これは「我が国（地域も含む）の伝統や文化について、それらの価値を理解し、尊重するとともに、継承・発展させるための教育（主に学校教育）」のことです（永添祥多『日本文化理解教育の目的と可能性―小・中学校の事例を中心として―』風間書房、平成二十三年）。この中には、伝統的な古い文化だけではなく、新しい現代の日本文化も含んでおります。

もともとこの言葉は、約二十年前、当時兵庫教育大学におられた中村哲先生―現在の和文文化教育学会会長―が同大学に「日本文化理解教育プログラム」というものを創り、そのプログラムの名前からスタートしました。

他には、博報堂が博報賞の中に「日本文化理解教育部門」というものを設けておりますが、「日本文化理解教育」を書籍名で使っているのは多分、私だけだと思います。

次に、「日本文化理解教育において対象となる「我が国の伝統や文化の具体的内容」について、東京都と兵庫県の取り組み事

例から整理しておきます（永添祥多『高等学校の日本文化理解教育』風間書房、平成二十一年、同『日本文化発信力育成の教育』風間書房、平成二十八年）。

まず東京都は、約二十年近く前から、東京都教育委員会主導で非常に熱心にこの伝統・文化教育の授業をやっております。東京都の場合は「日本の伝統・文化理解教育」と称していますが、「伝統的な日本文化」だけではなく、漫画やアニメなど「現代の日本文化」も含めています。

私が言う日本文化理解教育もそうですが、東京都が示した日本文化というのは古い伝統・文化だけではなく、現代の文化も入っているということです。

次に兵庫県ですが、兵庫県教育委員会も非常に日本文化理解教育に熱心で、「学校設定科目 日本文化」という、県立高等学校における地理歴史科の中の「学校設定科目」としてあります。『学校設定科目 日本文化』（兵庫教育委員会、平成十九年）というテキストに示された「日本の文化」の内容は、大きく「伝統的な日本文化」と「現代の日本文化―Japan Now」に分けています。兵庫県では、そこからさらに細かく諸文化を分けています。これは多分、東京都が先にこの事業を始め、それを兵庫県が詳細化する形で創ったからだと思います。

我が国の伝統や文化の教育に対する学校現場の意識実態

それでは、「我が国の伝統や文化の教育に対する学校現場（小・中学校）の意識実態」について見ていきます。

平成二十一年十月実施の質問紙調査で、データの古くて申

し訳ないのですが、多分、今同じ調査をしたとしても、あまり変わらないのではないかと思います。ただ、先生方の取り組みについては、逆に後退しているのではないかと思います。というのは、この調査後、やれ英語だの、プログラミングだのというのが入ってきますから、伝統や文化の教育をやる暇なんてないよ、という事情もあると思います。

この平成二十一年十月実施の質問紙調査は、福岡県行橋市（福岡県北東部・人口約七万人）の市内小学校二校、市内中学校一校の教員・児童・生徒を対象としました。

有効回答数は、小学校教員（教諭及び臨時講師）二十九名、中学校教員（教諭及び臨時講師）十七名、小学校児童二百二十六名（五年生百十四名・六年生百十二名）、中学校生徒二百七十名（二年生百五十八名・三年生百十二名）でした。やや先生方の数が少ないのですが約五十名、子供たちは約五百名に回答してもらいました。

なぜこの地域を研究対象としたのかと言いますと、行橋市の学校教育では、小・中学生に「郷土科」を導入しております。この「郷土科」という行橋市独自の郷土学習で歴史とか文化とかを学んでいます。現在では、行橋市内小・中学校の全児童・生徒に、「郷土科」という授業を行っています。

また、行橋は、短歌の上の句と下の句を複数人で詠む「連歌」の伝統があり、連歌教育で有名です。

こうしたことから、行橋を対象として質問紙調査を行いました。さらに私は、行橋市教育委員会の外部評価委員長として加わっておりますので、教育委員会を通して質問紙調査をしやすかったということもあります。

教員の意識実態

まず「我が国の伝統や文化の教育に対する教員の意識実態」を窺うための先生方に対する質問として、「伝統や文化の教育に関する関心の有無」を訊ねました。小・中学校の先生全体のうち、大体約八割は伝統や文化の教育に関心を有しておられるという結果が出ました。

先生方に日本文化の中で「重視すべき内容」は何かをお訊きしたところ（複数回答可）、①「地域文化」（三十二名）、②「生活文化」（三十名）、③「伝統・文化」（二十八名）、④「日本の歴史」（十五名）でしたが、⑤「現代の日本文化」（五名）はあまりありません。小・中学校教員の殆どは、日本文化の教育を伝統・文化の教育と捉えているということになります。

「伝統や文化に関する教育の実践経験」については、「行っている」が四〇%、「行っていない」が六〇%で、小・中学校教員の中で意識的に伝統や文化の教育を行っている教員は四割に過ぎませんでした。実際には何らかの形で行っておられると思うのですが、意識的にそういう単元を設けたりして行っている先生方は、まだそんなに人数は少ない。

では、先生方は、伝統や文化に関する教育をどのような形で行っておられるのか。「伝統や文化に関する教育の実践形態」（複数回答可）は、「教科の授業」が八名、「総合学習」が十一名、「道徳」が一名、「その他」が一名でした。音楽とか図工とか社会とか、そういう教科で行っている場合もありますが、やはり総合学習が最も多く、一番扱いやすいと言えます。



児童・生徒の意識実態

ここからは、「我が国の伝統や文化の教育に対する児童・生徒の意識実態」を見ていきます。

まず、「我が国への児童・生徒の帰属意識」について確認するため、約五百名近い小・中学生に「我が国に生まれて、日本という国に生まれてよかったと思うか」という質問をしました。すると、小・中学生の約九割が日本という国に生まれてよかったと思っている。これは、同時期に総理府が行った日本全体の初等・中等教育の児童・生徒を対象とするアンケート調査でも、ほぼ同じような結果が出ております。

また、今年の十月、私が卒業論文指導をしている学生が、福岡市内の別の大学の大学生約五百名に同じアンケートを取りましたら、やはり九割が「日本という国に生まれてよかったと思っている」と回答し、ほぼ同じような結果が出ております。そのため、今の若者たちは、現在であるのが十年近く前であろうが、これはほぼ変わらない。若者の大部分が日本という国に生まれてよかったと思っているのは非常に心強い。もちろん問題はいろいろあり、なかなか生き辛い社会になっておりますが、戦争や紛争の最中にあり、言論の自由が無いという所に比べれば、日本という国に生まれて良かったと考えているようです。

「我が国に生まれて良かったと考える理由」については、自由記述で答えてもらいました。その中で回答数が多い順に挙げますと、やはり一番目は圧倒的に「平和な国だから（戦争のない国だから）」。二番目は「豊かな国だから」。豊かというのは、

回答には詳しく書いていませんが、これは多分、豊かというの
は、心の豊かさよりも、むしろ物質的な豊かさのことだと思っ
ております。三番目に多かったのが「日本の文化は多彩で伝統
があるから」。これは少し意外な感じがしましたが、小・中学
生も日本の文化については関心を持っているようです。そして、
四番目には「科学（工業）が発展しているから」、五番目には「自
然環境に恵まれているから」という答えが続きます。

続いて、似たような質問ですが、「我が国の文化は世界に誇
れるものだと思うか」を小・中学生に訊きました。やはり、「日
本という国に生まれてよかった」とほぼ同じぐらいの割合であ
る九割以上が、「日本文化は世界に誇れるもの」だと捉えてい
ます。これも非常に心強い感じがいたします。

さらに、「我が国の文化を大切にし、将来も残していくべき
だと思うか」という質問についても、やはり九割以上が、「誇
れるべき日本文化を尊重し、将来に継承していくべき」だと捉
えています。当時の小・中学生は現在二十代、日本の将来を担っ
ていく年代ですが、かなり心強い感じがします。

次に「我が国の伝統や文化を実際に体験したことがあるか」
という質問です。実際には何らかの形で体験しているはずなの
ですが、約五割しか伝統や文化の体験とは自覚していません。

「我が国の伝統や文化に関する勉強に興味、関心があるか」
という質問に対しては、小・中学生の六割が伝統や文化の学習
に興味、関心があると答えており、教員側の関心が八割である
ことを考えると、両者間にやや意識のずれが存在していると感
じています。ただ、これは対象となった人数が圧倒的に違いま
すから、一概には言えない。五十名弱と五百名弱ですから。

「日本の文化を外国人に日本語で説明できるか」という質問
に対しては、あてはまると答えた小・中学生は三割強程度しか
おらず、外国人に対する日本文化の発信については、小・中学
生の日本文化発信力の育成が課題であることが分かります。

「学校で我が国の伝統や文化に関する授業を受けたことがあ
るか」という質問に対しては、あてはまると答えた小・中学生
は六割弱しかいませんでした。実際には、歴史や道徳などの授
業で受けているはずなのですが、伝統や文化の計画的・系統的
な指導学習が必要であるところだと思えます。

以上の設問に対する結果を踏まえ、「伝統や文化の学習経験
と我が国及び我が国の伝統や文化に対する意識との関連」につ
いて統計処理をした結果、日本の伝統・文化に関する学習経験
の機会を増やすことによって、我が国及び我が国の伝統や文化
に関する意識のさらなる向上が期待できると考察することがで
きました。ここに日本文化理解教育の必要性があります。

学校現場は何を求めているのか

ここで調査対象を教員に戻しますが、「学校現場は我が国の
伝統や文化の教育に何を求めているのか」を確認したいと思
います。このアンケートで伝統・文化教育の単元を設けるなどし
て意図的、計画的、系統的に実践された先生方に質問しまし
た。

まず、「教員は伝統や文化の教育でどのような力が育成され
たと考えているのか」という質問に対する回答結果（複数回答
可）についてです。これは予め選択肢を設けております。「感
謝する気持ち」と「礼儀・マナー」がそれぞれ十一名、「表現力」

が九名、「相手を思いやる心」が七名、「物事を最後までやり遂げる力」が三名、「協調性」と「人の話を最後まで聴く力」がそれぞれ二名、「観察力」と「学習意欲全般に対する波及効果」がそれぞれ一名で、「集中力」と「忍耐力」を選んだ方はいませんでした。つまり、規範意識や感謝の念、思いやりといった情意面、さらに自己表現力などが伝統や文化の教育の成果と捉えています。小学校の先生方は、単に伝統や文化を教えて、日本の文化はこういう素晴らしい文化ですよ、皆さん大事にしていきなさいよ、ということだけではなくて、そういった教育に伴う波及効果があると考えている。そのため私は、ただ、伝統・文化を理解させるだけではなくて、そこからさらに発展させて、こういった波及効果があることを広めていきたいと思っています。

次は、また調査対象を児童・生徒に戻します。「児童・生徒はどのような内容を求めているのか」を見るために「どのような内容に興味・関心があるか」（複数回答可）を訊ねました。先述したように、教員が重視すべき内容として挙げていたのは、①「地域文化」、②「生活文化」、③「伝統・文化」、④「日本の歴史」、⑤「現代の日本文化」でした。ところが、小・中学生は、①「生活文化」（百二十七名）、②「日本の歴史」（百十九名）、③「現代の日本文化」（百十八名）、④「伝統・文化」（百三名）、⑤「地域文化」（三十四名）となっていて、結構「現代の日本文化」への興味・関心が高い。要するに指導する教員側と指導を受ける児童・生徒の間に伝統や文化の内容について意識差が見られるのです。先生方は、「現代の日本文化」についてはさほど重視していないのに対して、小・中学生は、むしろ漫

画とかアニメとか、「現代の日本文化」に興味・関心があるということですが。「日本の歴史」も結構関心を持たれている。特に小学生は、圧倒的に「日本の歴史」に関心がある。これは中学生になったら、ガタツと下がるのです。これは歴史教育の問題がある。高等学校もそうですが、やはり覚える内容が多い。小学生までは、歴史に大変興味を持っている児童が多いのですが、中学になるとガタツとこの値が落ちていきますし、社会科学の歴史学習に対する別の調査においても、やはり歴史が嫌いだという子どもが中学生になると増えていきますので、このあたりは、中学校以降の歴史教育に問題があるうと思っています。

以上のことを踏まえ、私がまとめた「伝統や文化の教育を学校で行っていくうえでの課題」を挙げておきます。

一番目が「教材開発や教材研究といった教材に関する問題」や「予算確保や校内の施設・設備に関する問題」です。教材開発や施設に関する問題については、「伝統や文化の教育」では、普通の授業と違い特別な教材を作ったりしなければいけません。場合によっては外部の方をお呼びしたり、外部に出ていくということもあります。教材開発のみならず、体験型の授業も多くありますので、予算確保が必要です。

二番目が「指導方法に関する問題」や「教育課程上の位置づけに関する問題」、「外部指導者確保に関する問題」という問題です。

三番目が「担当教員の負担感や多忙感に関する問題」や「校内の共通理解のもとでの協力体制構築に関する問題」で、要するに教員自身の問題です。現在、特に英語だのプログラミングだの、特に小学校では大変な状況になっていると思えますが、

それに加えて、「また伝統・文化か」と思われるという問題もあるかと思えます。これは学校教育現場の先生方から直接聞き取りした内容からも、こういったような課題があるということが裏付けられます。

無限の可能性（一） 児童・生徒の変容

最後に、「日本文化理解教育が学校教育にもたらす無限の可能性」に言及しておきます。

まず（一）「児童・生徒の変容」です。具体的には、①我が国の伝統や文化に対する理解や尊重の気持ちの育成、②我が国や郷土に対する帰属意識の育成、③日本人としてのアイデンティティの育成、④生活態度の改善（自己表現力・コミュニケーション能力・人間関係構築能力の向上、集中力や忍耐力の育成、達成感や成就感の獲得、礼儀・マナーの習得、規範意識の向上など）、⑤情意面の改善（豊かな感性の育成、自己肯定感の向上、自尊心の育成、思いやりの心や感謝の念の育成など）、⑥学力に対する促進効果（伝統や文化の学習が他の教科学習全般の学力向上につながった事例）が挙げられます。

①では、我が国の伝統や文化に対する理解や尊重の気持ちが育成される。これは、伝統・文化教育や日本文化理解教育の第一義的な成果だと思っております。

②は、教科によっても分かれませんが、小・中学生の我が国に対する帰属意識は九割です。現在、地域おこしとか、あるいは地域社会に若者がいなくなつて困るといふようなことをよく聞きますが、そういったようなところにも、将来的には寄与する

可能性があるのではないかと思っております。

③は、日本人としてのアイデンティティの育成ですが、②の帰属意識とほぼ同じようなことです。

④の生活態度の改善は、先生方に対するアンケート結果からも分かりますように、自己表現力・コミュニケーション能力・人間関係構築能力の向上、集中力や忍耐力の育成、達成感や成就感の獲得、礼儀・マナーの習得、規範意識の向上などにつながります。

勉強が苦手な子でも、伝統・文化の実践、例えば太鼓や踊りとか、何でも良いのですが、それらを通して、自分の新しい能力を見つけてきたり、あるいは勉強では得られなかった達成感とか成就感が獲得でき、それが結果的には自分の自信につながっていると聞いた児童・生徒の事例も、私が様々な学校で行った過去の調査では出てきております。したがって、このあたりは確実にできるのではないかと思っております。

それから、礼儀・マナーの習得については、武道はもちろんです。茶道とか生け花、日本の伝統芸能でも当然礼儀を重視します。結果的にはその習得につながります。小・中学生は最初のうちは戸惑っていても、だんだんと慣れてくる。結果的には規範意識が向上してくるということです。

⑤の情意面の改善は、豊かな感性の育成、それから今、児童・生徒は自己肯定感というか、ものすごく自分の能力に対して自信がないということがよく言われますが、これが向上し改善されたという事例も見られます。自尊心と自己肯定感と同じようなものですが、自分は勉強もスポーツも得意ではないと感じている児童・生徒が伝統・文化の学習をすることによって可能

レベルとしては、東京都が初めて日本文化理解教育の実践を取り入れております。兵庫県は県立高等学校における地理歴史科の中の「学校設定科目」として「日本の文化」を取り入れております。その他、埼玉県教育委員会において、高等学校の学校設定教科として「日本の文化」というカリキュラムを作り、指導書まで作成しております。これは数年前に調査を行いました。さらに、市の単位では、広島県東広島市、それから静岡県島田市です。こういう所がたいへん力を入れていきます。

また、文部科学省の国立教育政策研究所教育課程研究センターでは、教育課程研究指定校事業の一環として「伝統文化教育」も位置づけられておりますから、そのホームページを見れば、学校単独で行っている実践報告などは見ることが出来ます。ただ、東京都も濃淡さがありまして、特に力を入れているのは武蔵村山市です。和文化教育学会では平成二十六年度に和文化教育第十一回全国大会武蔵村山大会を行いました。教育長が非常に熱心で、本も書いておられるぐらいです。こういった伝統・文化に関する学習を教育環境、自校の特色ある教育環境として校外にPRすることができるだけではなく、新しい教育活動にチャレンジすることによって、校内も生き生きとすることが期待できるということです。

② 「開かれた学校づくり」にもつながる」という面もあります。「開かれた学校づくり」というのは昔からある言葉ですが、先生方だけではどうしようもない、教えられない地域の踊りとか、地域の料理などがあります。家庭科や総合学習で行ったりする場合もあります。そこで、地域住民を外部指導者として学校に招いて指導を仰ぐと共に、その学習成果を地域住民に発表

することによって、伝統や文化の学習を接点として、双方の「開かれた学校づくり」が実現できるということになります。したがって、伝統や文化の教育は、学校経営や学校の活性化にも非常に役に立つものであると思います。

無限の可能性（四）学校と地域社会との連携体制の構築

（四）「学校と地域社会との連携体制の構築」にもつながります。昔から、特に小・中学校については地域社会との連携ということがよく言われますが、伝統や文化を接点として、学校と地域社会との連携体制を構築できるという可能性があります。伝統や文化に関する学習を行うためには、学校を取り巻く人的・物的資源の有効活用が不可欠であり、地域社会の協力が必要となってきます。地域社会に継承されてきた伝統や文化そのものが教材であり、それらを伝えている地域住民が指導者である。それゆえ、伝統や文化の学習は地域との連携をすることによって、より教育成果、教育効果上がる。特に地域文化に関しては、学校の先生方だけでは、なかなか難しいということ、こういった連携体制の構築にも役立つこととなります。

無限の可能性（五）国際理解教育の前進

最後は、（五）「国際理解教育の前進」という点です。

私は、国際理解教育が専門ではないため、詳しいことは言えない立場ですが、国際理解とか国際化というのは、まず自分の国に対する文化とか歴史とか、あるいは言語、それに対する深

い理解があつての国際化なんだよということは、常々学生たちに言っております。国際理解教育⇨異文化理解教育と勘違いをしている学生が結構います。実は、私が担当している「日本史概論」の試験では、国際化と日本史学習の関係について問う問題を出してあります。すると、国際化を誤解しているような解答が見受けられます。

私は今、教職科目として「教職論」、「教育行政学」、「教育実習指導」、「教育実習」、「教職実践演習」、それから、ゼミを受け持っていますが、教養の「日本史概論」も担当しており、この科目に関連してちょっと変わった教科書を作りました。

私は、令和五年四月に『徳川將軍の治世と人物像』（風間書房）という本を出しました。これは大河ドラマで「どうする家康」が放送されているからではなく、出版と重なったのは偶然だったのですが、私はもともと学部時代に江戸幕政史に取り組んでおり、卒業論文は、五代將軍徳川綱吉の側用人制度について書きました。側用人というとすぐに柳沢吉保が思い浮かびますが、実は柳沢以外に十数人側用人がいました。中には外様大名とか、あるいは一ヶ月で罷免されたという側用人もいました。いかにも綱吉らしいのですが、実は初代側用人の牧野成貞や柳沢吉保だけではなく、十数人の側用人がいた。その側用人がどういう連中で、どういう形や理由で採用されたのかが分かりにくかったのですが、そこを調べました。このように大学時代は江戸幕政史、特に元禄、享保の時期に取り組みましたので、今、大学では、日本史概論とはいっても浅く広く通すのではなく、江戸の徳川將軍について詳しく話しております。

徳川將軍の政治については概説書とか専門書が数多くありま

す。人物、エピソードについても結構出ておりますが、初代將軍徳川家康に始まる徳川歴代將軍たち十五代の治世の概要や歴史的意義と各將軍の人物像について並列的に書いたものはあまりありません。この本は、かなり大判で、結構分厚い本なのですが、殆どカラー図版を使っております。また、元号、人名、地名には全部読み仮名を付けております。今の学生たちは、元号が読めないのです。弘化とか嘉永とか、慶長も読めない学生がおります。まして、史学科の学生ではありませんので、教養科目です。私は、日本史概論では歴史を好きになつてくれればいい、日本の歴史に興味を持ってくれればいいと思っております。別に専門家を養成するわけではありませんので。したがって、この『徳川將軍の治世と人物像』というのは、自分で言うのも何ですが、かなりユニークな、大学生向けというよりも高校生が読んでも分かるような本として書いています。

おわりに

少し脱線しましたが、「日本文化理解教育が学校教育にもたらす無限の可能性」の最後に挙げた「国際理解教育の前進」とは、我が国の伝統や文化の教育が、結果的には世界の諸国家・諸民族との共生の態度を育成することを目標とする国際理解教育にまで発展していくことが期待できるといふことです。

私が書いた先述の『日本文化発信力育成の教育』という本は、東京・表参道ヒルズのすぐそばにある神宮前小学校を調査して、それをもとに国際理解教育の中に日本文化理解教育を位置付けるといふことをしました。結局、自分の国の伝統や文化を理解

すること、世界の諸民族との文化に対する理解は無関係ではないということを書いております。国際理解教育というと、異文化理解教育みたいになってしまいがちですが、そうではなく、国際理解教育の前提、その中心に日本文化理解教育を位置付ける必要があるのではないかと述べています。

我が国の伝統や文化に対する理解という基盤に立って、諸外国の伝統や文化の理解・尊重にまでつなげていくことができる。つまり、我が国の伝統や文化に関する教育が、結果的には世界の諸国家・諸民族との共生の態度を育成することを目指す国際理解教育にまで発展していくと期待できるのです。

したがって、このような観点からすれば、日本文化理解教育は、国際理解教育の中に新しい分野を拓く可能性を有しているといえると思います。今、特に私が考えているのは、日本文化発信力育成の教育です。つまり、単に日本の伝統や文化を子どもたちが学んで、その副次的効果として情意面などをはじめとする波及効果が得られるだけではなく、コロナ禍も終わり、今後はインバウンドでどんどん外国の方が日本に来られると思います。さらに、残念ながら世界の中には、まだまだ日本のことを本当に理解してくれていない、そういう地域や国もあります。したがって、日本のことをもっと本当に理解して、日本という国の、もちろん歴史的にはあやまちも犯してきましたけれども、しかし、良さを発信できる、日本の文化を発信できる子供たちを育成したい。それが、この国際理解教育の前進にもつながっていくのではないかと考えています。

私の話は以上です。ありがとうございました。



〔質疑応答〕

司会・藤田大誠（國學院大學人間開発学部健康体育学科教授）

永添先生、ありがとうございます。私も太田直之先生（國學院大學人間開発学部長）と二人（オムニバス）で國學院大學人間開発学部のコア科目（必修科目）「日本の伝統文化」を担当しており、オンライン授業（オンデマンド型授業）という形式で行っております。今回の講演では、永添先生がさまざまな学校の伝統・文化教育の実態を調査されてきた中で、アンケート調査をもとに、先生のおっしゃる「日本文化理解教育」の効用と可能性をお話いただきました。児童・生徒、教員、さらには学校全体、地域社会、そして国際関係というところまでの広がりを持つ教育なのであろうと受け止めた次第です。

それでは、続いて質疑応答に移ります。

前田麦穂（國學院大學人間開発学部初等教育学科助教）

御講演ありがとうございます。行橋市の調査結果のところをたいへん興味深く拝聴しました。今手元で調べたら、行橋市では、平成二十五年度から「郷土科」を全市の小・中学校で行われるようになり、現在まで小・中続けているということ、すごいと見ていました。先生が取られたデータが平成二十一年度ということで、「郷土科」を始める前だと思えます。実際に行橋市で「郷土科」を始めていった後に、例えば、このデータの中にあるような児童・生徒の文化の発信力が伸びたかどうか、あるいは、関心が持つ児童・生徒が増えたというように、「郷土科」を始めたことによる児童・生徒の変容が分か

る追跡調査などは、もしご存じでしたら教えていただきたいというのが一点目の質問です。

二点目の質問は、同じく行橋市の調査結果のうち、児童・生徒がどのような内容に興味・関心があるかというところでは、「地域文化」が結構少ないという点、教員の思いとは裏腹に、児童・生徒に関心を持ってもらうのはなかなか難しいタイプの文化なのかと思って見ておりました。その一方で、行橋市が「郷土科」として、まさに「地域文化」のことを学校教育で取り組んでいく中で、児童・生徒の関心を引くようにプログラムを作っていくというのは、かなり不利な状況からのスタートだったのではないかと思います。そういう点について、どのような取り組みをしたのかということ、先生は他の小・中学校もさまざまな調査されているということ、他の事例でも結構ですので、地域文化に関心を持たせるということについて、何かご存じのことがありましたら教えてください。

永添 最初の御質問ですが、実は行橋市は、私が調査した平成二十一年の後に市全域で「郷土科」を始めるようになりました。ですから、私が調査しているときは、「郷土科」は一部において先進的、モデル校的に少し始めていた段階でした。先生がおっしゃるように、行橋市が全域の小・中学校で「郷土科」を取り入れたのは調査した後の平成二十五年になります。

二点目の御質問については、今後、私も追跡調査をしたいと思っておりますが、まだできていません。実は、令和六年二月二十四日に開催予定の和文化教育学会第二十回全国大会が本来、九州当番のため、九州のある大学で開催する予定だったん

ですが、現地開催ができなくなってしまったため、「オンライン九州大会」となり、なぜか私が九州地区だから実行委員長をすることになりました。オンラインでやりますから、和文化教育学会のホームページから入れば、シンポジウムが見られると思います。現時点での行橋市の伝統や文化、「郷土科」の学習の実践の取り組みについては、このシンポジウムに登壇される行橋中学校の教頭先生から御発表いただけるようになっております。そのシンポジウムは当然、私が司会をしますので、それを御覧になれば分かるのではないかと思います。今回お示しいた調査結果は全体的に古いデータですので、申し訳ないです。行橋市が全域で「郷土科」を取り入れたことよって、さらに具体的な取り組みが進められていると思うのですが、今のところはそのぐらいしか分かりません。

前田 どうもありがとうございます。

司会 永添先生、質問の中にあつた、生徒・児童は「地域文化」の関心が低い、それに対してどういう取り組みがあるのかという点についてはいかがでしょうか。

永添 児童・生徒が「地域文化」への関心が低いというのは、教育長も小・中学校も言っておられましたので、そういうところから「郷土科」を始める原因となったのかもしれない。児童・生徒たちは、あまり自分たちの地域について知りたいと思っていないみたいです。これは他市部でも似たような現象があるのではないですか。行橋だけの現象ではないと思います。

司会 「郷土科」のように制度化をしていくと、「地域文化」の教育もより活発にしやすいということでしょうか。

永添 令和六年には、同じような調査をしますので、その調査結果が出てくればもう少し分かると思います。

司会 ありがとうございます。

青柳秀幸（國學院大學人間開発学部健康体育学科助手）

たいへん貴重な御講演、ありがとうございます。私は令和五年四月から健康体育学科に着任しております。

私は、オリンピック東京二〇二〇大会の開催に当たって推進されたオリンピック・パラリンピック教育の在り方や課題について、学位論文を作成しております、学校の多忙感であったりと、まさに同じような問題点があると伺い、たいへん興味深く拝聴しました。

そこで大きく二点の質問がございます。こういった教育が良いものであると思う一方で、ある意味、一方的な価値観の押し付けになるのではないかと、日本のことを良いと捉えることでナシヨナリズムを助長するのではないかとというような批判とが見方が出てきます。それゆえ、そういった視点が含まれた教育が、この日本文化理解教育にはおありなのか、また、あるとすればどんなものなのか。これが一点目です。

二点目についてです。先生方のように、こういった教育現場のお声を拾っていただいて、こういった教育を指導する国の行

政などと協働して、やがては実際のこの教育の担い手となる学校教育現場の先生方と問題意識を共有しながら連携、協働していく必要があると思うのですが、研究職と現場、または行政をつないで議論し、実際に現場に落としここうとするような、コンソーシアムやシステム、協力関係などがあれば、ぜひ御教示をいただきたいです。宜しくお願いいたします。

永添 第一点目は確かに先生がおっしゃるとおりです。やはり誤解を受ける可能性があるのではないかと問題が、我々の和文化教育学会でもテーマになったことがあります。ですから、価値観を教えるというよりも、児童・生徒に考えてもらおう。だから、判断は児童・生徒たちがするわけで、歴史などは特にそうなのですが、一方的な価値観を教え込むとか、そういうわけではなくて、常に世界に目を向けつつも、日本と世界の相対化、あるいは日本文化の良さ、世界や諸外国の文化の良さを比較で見ると、見るような形で、その前提として、この教育があります。

二点目は、毎年開催されている和文化教育学会の全国大会では、シンポジウムや研究発表で、大学教員だけではなく、必ず多くの学校現場の先生方にも発表していただいているのですが、それ以上の協働については、今のところは私はした覚えもないし、あまり聞いたことはありません。今後の私自身の課題です。

青柳 学校現場の先生方に学会などで発表していただくという視点がありませんでした。オンラインで参加機会も多様化していると思いますので、大切な取り組みですね。

永添 どうもありがとうございます。

司会 他にいかがでしょうか。

備前嘉文（國學院大學人間開発学部健康体育学科准教授）

貴重な御講演をありがとうございました。私も、伝統や文化にすごく興味があつて、とても面白く聴かせていただきました。その中で先生は、現代の日本文化と伝統的な日本文化とを分けてお話をされていたのですが、グローバル化が進む中で、例えば、ダイバーシティや多様性とか、合理化ということがどんどん日本の中でも進んでいます。例えば、性別の問題についてもLGBTQの理解であるとか、そういう事象は今までの日本の文化には無かったものだったのではないかと思います。それをどう考えていかれるのか。例えば、スポーツで言えば、大相撲の土俵に女性は上がれないとか、そういった伝統に対して、新たな考え方やどう融合していくのかというの、私もこれからのように日本の文化が進んでいくのかと考えるところで、こういった伝統文化の教育を行う場合、各教員や各機関にしても、例えば、伝統を過去の遺産として考えて話すのか、それとも、どんどん変わり続けていくものなのかという、そういったところでどこまで折り合いをつけているのかということですが、もし見解があれば教えていただければと思います。

永添 これについては、やはり昔のことに固執するべきではなく、常に文化というのは発展的に、変容を遂げていくのだと、そういう視点で捉えております。ですから当然、昔の伝統芸能

なども、例えば、歌舞伎もどんどん変わっています。そうでないと発展しませんし、そのままというわけではありません。日本の伝統・文化と言っても、昔のことばかりをそのまま教えるというのではなく、当然、日本の文化というのは発展して変容して来ている。そして、現代まで受け継がれてきてますから、今後ともそう在るべきだと思っています。

備前 ありがとうございます。

司会 あと、お一方ぐらい。いかがでしょうか。

夏秋英房（國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授）

ありがとうございます。地域教育など私の研究対象にも沿っている内容で、とても興味深く伺いました。伝統・文化教育は、非常に大事な「日本文化理解教育」であるということと、とても展望のある御講演をいただいたと思います。

日本社会はこれから、どんどん外国人が入って来て、外国の方たちの存在なしでは日本社会が生きていけないような状態になっていくことが見えているときに、日本文化理解教育はどういった展望を持っていらっしゃるのか。

先ほど手元で調べたら、行橋市では、転入者の児童・生徒は三割ぐらい。さらに外国人も入ってきて、地域に根ざすということは、なかなか難しい状態になるのではないか。これは日本全国で起きていることだと思のですが、日本文化理解教育は、そういう異質性、異質な背景を持った児童・生徒たちに対して地域文化を伝える、あるいは日本文化を伝えるということの意

味と方向について、どうお考えなのかというところを伺いたいと思います。よろしく願います。

永添 九州においても、自動車関連産業が積極的に外国人を受け入れているところがあり、外国籍の児童・生徒がたくさん暮らしている地域もあります。

そういう児童・生徒に対して、日本に来ただからそれに従えとか、郷に入っては郷に従えとか、そういう方針ではないと思います。外国出身の児童・生徒は日本語の学習から始める場合も多いと思います。したがって、その学習の中で、あなたたちが今暮らしている日本という国はこういう国で、日本語というのはいかような言葉であるということ伝える必要があります。文化的な基盤の異なる外国籍の児童・生徒たちを温かく教育するという形での日本文化理解教育です。

むしろ日本人の児童・生徒と外国籍の児童・生徒が互いに教え合う。日本人の児童・生徒が日本の文化について伝えたりする一方で、逆に外国の児童・生徒の方から、その国の文化を学ぶ。そういう双方向的、あるいは外国籍の、文化的基盤の異なる児童・生徒たちを温かく包み込むような形での日本文化の発信、そういうものを考えております。

夏秋 ありがとうございます。

司会 それでは時間が参りましたので、ここで永添先生の御講演は終了いたします。永添先生、ありがとうございます。